

氏 名	岡田 成弘
学 位 の 種 類	博士（コーチング学）
学 位 記 番 号	博乙第 2922 号
学位授与年月	平成 31年 3月 25日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
審 査 研 究 科	人間総合科学研究科
学位論文題目	キャンプが小中学生の自然に対する態度に及ぼす影響 ー遠征活動と自然へのアタッチメントを感じる体験に 着目してー
主 査	筑波大学教授 博士（コーチング学） 會田 宏
副 査	筑波大学教授 坂本昭裕
副 査	筑波大学教授 博士（コーチング学） 渡辺良夫
副 査	常葉大学准教授 博士（体育科学） 遠藤知里

論文の内容の要旨

岡田 成弘 氏の博士学位論文は、遠征活動と自然へのアタッチメントを感じる体験に着目し、キャンプが小中学生の自然に対する態度に及ぼす影響について明らかにしたものである。その要旨は以下のとおりである。

【研究の目的】

キャンプが自然に対する態度を改善させる効果を持っていることについては、国内外の先行研究によって検証されている。しかし、効果につながる要因や体験については、十分に検討されていない。特に、キャンプの主要プログラムの1つである遠征活動が小中学生の自然に対する態度に及ぼした効果を実証した研究、自然に対する態度に影響を及ぼすような内的体験を検討した研究は少なく、キャンプが小中学生の自然に対する態度に及ぼす影響については十分に解明されていない。そこで本論文で著者は、小中学生を対象に、まずキャンプによって変化する自然に対する態度の構造、次にキャンプにおける遠征活動が自然に対する態度に及ぼす効果、さらにキャンプ中の自然へのアタッチメントを感じる体験が自然に対する態度に及ぼす影響のそれぞれについて検討し、キャンプが小中学生の自然に対する態度に及ぼす影響を明らかにすることを目的としている。

【論文の構成】

著者は本論文において、以下の3つの研究課題を設定し、それぞれの課題を解決する調査を行っている。

(研究課題 1) キャンプによって変化する自然に対する態度の構造

研究課題 1 では、キャンプ参加者からの項目抽出及び探索的因子分析によって、キャンプにおいて変化する自然に対する態度の因子構造を検討した。その結果、キャンプにおいて変化する自然に対する態度は、「自然配慮」、「肯定的感情」、「キャンプ観」、「環境倫理」の 4 因子で構成されていることを明らかにしている。さらに構造方程式モデリングを用いて確認的因子分析を行い、その因子構造の信頼性及び妥当性を検討した。その結果、課題 2 及び課題 3 でこの因子構造を用いても問題がないことを確認し、キャンプ版自然に対する態度因子を完成させている。

(研究課題 2) キャンプにおける遠征活動が自然に対する態度に及ぼす効果

研究課題 2 では、遠征活動を含んだキャンプと、遠征活動を含まないキャンプ及びキャンプ不参加者とを比較し、遠征活動が自然に対する態度に及ぼす効果を検討した。その結果、遠征活動を含んだキャンプの参加者は、キャンプ不参加者と比べて、自然に対する態度が向上しており、特に肯定的感情因子とキャンプ因子において有意差が見られたことを明らかにしている。また、遠征活動を含まないキャンプの参加者と比較し、遠征活動を含んだキャンプの参加者の方が、自然に対する態度が向上しており、特にキャンプ因子において有意差が見られたことを明らかにしている。以上の結果から、遠征活動を含んだキャンプを行うことによって、小中学生の自然に対する態度が向上することを示している。

(研究課題 3) キャンプ中の自然へのアタッチメントを感じる体験が自然に対する態度に及ぼす影響

研究課題 3 では、まず、遠征活動を含んだキャンプの参加者を対象に量的調査を行い、構造方程式モデリングによって、キャンプ中の自然へのアタッチメントを感じる体験と自然に対する態度との因果関係を検討した。その結果、自然へのアタッチメントを感じる体験から自然に対する態度の向上への因果関係モデルを証明している。また、自然へのアタッチメントを感じる体験高群は、自然に対する態度が向上し、特に自然配慮因子で有意差が見られたが、低群には有意な変化が見られなかったことを明らかにしている。以上の結果から、キャンプにおいて自然へのアタッチメントを感じる体験が深かった者は自然に対する態度が向上することを示している。

次に、遠征活動を含んだキャンプの 7 ヶ月後に参加者に面接調査を行い、修正版グランデッド・セオリー・アプローチを用いて、自然へのアタッチメントを感じる体験が自然に対する態度にどのように影響を及ぼしたかを検討した。その結果、自然へのアタッチメントを感じる体験は、直接的な自然とのふれあいが引き起こしており、自然への親愛・つながり・敬意を感じるという 3 つの体験によって構成されていたことを明らかにしている。また、自然へのアタッチメントを感じる体験によって、自然への肯定的感情、自然との精神的つながり、自然認識の深まり、畏敬の念、自然と人間の関係性の考慮という、新たな感覚や認識が芽生え、日常の要因に影響を受けながら、自然に対する積極的な姿勢に発展していくことを明らかにしている。

【結論】

著者は、以上の 3 つの研究課題を解決し、そこで得られた知見から、遠征活動を含んだキャンプが小中学生の自然に対する態度を向上させること、その中でも自然へのアタッチメントを感じる体験をすることが自然に対する態度を向上させていることを本論文の結論として示している。

審査の結果の要旨

(批評)

本博士論文は、キャンプによって変化する自然に対する態度の構造を、小中学生を対象に明示した点において、高いオリジナリティを有している。また、キャンプにおける遠征活動が小中学生の自然に対する態度を育むために効果があることを実証した点において、コーチング学研究領域の発展に貢献するものであると評価できる。今後、アタッチメント体験以外の要素も含めて、キャンプが自然に対する態度に及ぼす影響を検討することによって、研究の深まりが期待される。

平成 31 年 1 月 24 日、学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと論文について説明を求め、関連事項について質疑応答を行い、最終試験を行った。その結果、審査委員全員が合格と判定した。
なお、学力の確認は、人間総合科学研究科学学位論文審査等実施細則第 11 条を適用し免除とした。
よって、著者は博士（コーチング学）の学位を受けるのに十分な資格を有するものと認める。